

京まち工房



SUMMER
情報交流誌

no.

11

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

京町家からはじまる京都の新世紀 「京町家再生プラン」発表!



くらしの文化の 継承・発展

京町家に暮らす「人」が誇りを持ち、安心して保全・再生に取り組むネットワークづくりの支援



空間の文化の 継承・発展

建物としての京町家の適切な改修などの促進による保全・再生の支援



まちづくりの文化の 継承・発展

京町家の魅力を幅広い分野でより有効に活かすことによる保全・再生の支援



写真は「京町家まちづくり調査」の様々な活動の一部を紹介しています。

この度、京都市から、京都における貴重な歴史的文化的資源である京町家を活かしたまちづくりを進めていくため、21世紀に向けて京町家の再生を支援するための具体的な取組を21項目のアクションプランとして取りまとめた「京町家再生プラン」が発表されました。

この「京町家再生プラン」は、多くの市民の皆さんの参加を得て行われた「京町家まちづくり調査」の結果をはじめとして、京町家にお住まいの方々や、市民活動団体など、様々なご意見が反映されています。

このプランには、京町家の保全・再生に関する様々な支援ネットワー

クを形成することの重要性がうたわれており、行政の役割は、こうした民間を中心とした取組を促進するための環境整備を行うとともに、その先導的な取組を進めることであるとされています。

また、センターには各関係者間の橋渡し役としての役割が期待されており、今後センターにおいては、この「京町家再生プラン」を契機として、これからの京都を個性的でより活力あるまちにしていくため、市民・市民活動団体、企業、行政の協働による取組を進めていきます。

あなたのまちづくり拝見

榎原町並み整備協議会

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するこのコーナー。今回は第1回景観・まちづくりコンクールくらしの景観・まちづくり賞優秀賞を受賞した榎原町並み整備協議会によるまちづくりの取組です。

阪急桂駅から西に歩いて10数分、旧山陰街道の宿場町であったこの地域では、今も残る宿場町の歴史・文化の「再認識」と「共有」を活動の源としたまちづくりの取組が着実に進みつつあります。

都の意匠を持つ街道筋の家々

榎原宿は、丹波や山陰と京を結ぶ山陰街道と、嵯峨街道の結節点であり、江戸時代には京の都に入る直前の宿場町として、商いを中心に大いに繁栄し、京町家にも引けを取らない洗練された格子等で構成された「都の意匠を持つ」家々による美しい町並みを創りだしていました。



格子やむしこ窓を有する家々

まちづくり活動の背景

鉄道の開通は町の営みを徐々に変えていきました。意識も含めたくらしの変化や、建物の老朽化により、町並みも徐々にその姿を変えていきます。また、洛西ニュータウン等の開発や自家用車の普及による通過交通の増加など、町並み景観をはじめとするまちづくりの課題は大きくなりつつありました。

まちづくり活動は、そういった課題解決のための個々の人の努力に限界を感じ、町並みを保全するルールづくりの必要性を論議する気運の高まりを受けて、自治会有志による町並み保存の諸制度などの学習から始まりました。平成8年度からは協議会を設置し、京都市や専門家の支援も受け、様々な創意・工夫に満ちた取組が実施されていきます。このときに、「愛宕講」や「伊勢講」等の「講事」や、今も普通に使われている屋号等に象徴される地域の歴史的な文化に支えられた人の繋がりが、まちづくり活動を進める支えとなりました。

まちを良く知ることが大切にした取組

交通問題での取組として平成9年8月には、「旧山陰街道の交通に関する(アンケート)調

査」を実施(回答数270)。自家用車の保有率、移動手段や通行制限等に対する住民意識を把握しました。また、同年9月には交通量調査を行い、ピーク時の交通量や車輛の方向、渋滞の原因等を確認し、対策を考えるための具体的な資料を得ました。

一方、町並み景観の問題については、「母屋の建築時期」などのアンケート結果と、平成11年の「歴史的建築様式の継承に係る調査」を基にその特性を把握しました。

前者からは、江戸時代の建築7件を含む戦前建築が約4割あることが確認されました。また、後者からは、建築の特徴として、「中2階」の「むしこ窓」を持つ家と「本2階」の比較的新しい建物が、「出格子・面格子」などの歴史的意匠を共有し、町並み景観をまとまりのあるものとしていること、また、ゆるやかな道路の傾斜と道の曲がり、それぞれの質の高いデザインの家々を町並みとして、より引き立たせている効果をもたらしていることを確認しました。



榎原陣屋址(本陣)

地域の歴史、文化については、会長自身が郷土史家であったことも幸いし、「講事」等を通じて伝えられてきた話や、様々な文献等の資料、160件以上を確認した屋号の調査等を通じて、体系立てて、深く掘り下げられ、わかりやすく整理されました。

輪を広げ、確信を深めていく取組

それぞれの取組が地域住民の共通のものとなるよう、学習会やシンポジウムの開催と共に、「榎原町並みニュース」を発行してきました

た。また、駒札の設置や、自治連合会ニュースへの「駒札紹介」の記事の掲載等により、地域内外に取組の輪を広げる活動も行っています。



地域の歴史を伝える駒札

他地域への見学は、自らの町を客観的にみる機会ともなり、歴史的建物の質の高さと連続性など、守ろうとしている榎原の町並み景観の価値の高さを再認識させました。また、福井県熊川宿の見学会での、外観は保全しながら、独立性や機密性の確保のための間仕切りや建具の変更や、利便性の向上のための新しい設備による台所や浴室の改修等が具体的に示された「モデル住宅」との出会いは、景観の保全と現代的で快適な住まいが両立できることを知ることができ、活動に弾みをつけました。

榎原のこれから

活動は徐々に具体的な成果を生み出して来ています。交通面では、通学バスの路線の一部の変更を実現しました。また、交通規制等も検討しています。

町並み景観の面では、伝統的で洗練された格子などのデザインによる表構えの改修が最近2件行われました。また、活動をより具体化するため、平成11年3月には、景観整備の目標(案)として、①景観特性に応じた榎原らしい景観の維持及び向上に努める、②居住環境の改善のための協議会による相談支援、③京都市の「界わい景観整備地区」等の制度も考える、④景観の維持・向上を支える伝統技能を持つ職人への支援、が提案されました。

豊かな歴史や文化、それを維持発展させてきた人々の力により、京都らしい宿場町榎原の個性と魅力あふれるまちづくりが今後より一層、進んでいくことが大いに期待されます。

榎原町並み整備協議会会長 豊田英嗣さん

地域の役員の方々がその気になってきたことが喜びであり、心強く感じています。

会の活動を発展させていき、より多くの地域の人に榎原の町並みや歴史を知ってもらい、近隣の人も含めて、榎原の町名に誇りを持ってもらうと同時に、交通と景観という地域課題の解決に向けて、様々な活動に取り組みたいと思っています。



榎原自治会会長 服部友治さん

地域の皆さんの意見を聞いて、地域住民だけではなく、地域に来る開発業者などに対して、この地域にふさわしい建物を建ててもらおうためのルールづくりが出来ればと思っています。

住民の皆さんの気持ちがひとつになってきた段階になれば、具体的な手法などについてさらに煮詰めていきたいと思っています。



お知恵拝借～

大阪・平野郷のまちづくり ～遊び心のまちづくり～

今回は、大阪市の東南端に位置し、戦国時代にはまちの安全と自治を守るために二重の堀をめぐらし環濠集落を形成したという歴史ある平野郷のまちづくりからお知恵を拝借します。

「平野の町づくりを考える会」の発足

昭和55年の南海平野線の廃止に伴う八角形の駅舎の保存運動をきっかけに、「平野の町づくりを考える会」が発足しました。様々な事情により、駅舎の保存には至らなかったものの、「負けた」と思って引き下がるのではなく、この思いを次のまちづくりの糧として繋げていこうと始めました。「平野の町づくりを考える会」では、「歴史のぬくもりを生かすまちづくり」をテーマに、約40名の会員が、ハードとソフトを織り交ぜて様々な活動を展開しています。この会の特徴は、会則、会費、会長なしという点で、「こんなことがしたい」と、手を挙げた人がそのプロジェクトの長であり、それにみんなが協力するという方法をとっています。そして、昭和55年から20年もの間この活動が続いてきた秘訣は、「おもしろいとおもったことをやる」「ええかげんにやる」「人のフンドシで相撲をとる」という3つのことをモットーに活動してきたことにあります。一見ふざけているかのように見えますが、「それぞれ職を持つ身として生真面目に取り組む過ぎると息切れして長続きしない」、「おもしろいということが一番のエネルギーになり、きっちりと計画的に縛られたものよりも、ええかげん(程好い加減)にするほうが、思わぬハプニングや人との出会いによりいいものになる」、そして、「資金がないこの会では知恵と体を使う。そのため、人や様々な組織とネットワークを組んで活動する」ということがこの会の考え方です。

平野町ぐるみ博物館

「平野の町づくりを考える会」の活動の一つとして、平成5年から行われている「平野町ぐるみ博物館」活動があります。これは、地域全体を展示室と考え、地域の遺産・記憶を本来あるべきところで保存していこうというもので、観光客のためではなく、住んでいる人に自分たちのまちを再認識、再発見してもらうための活動です。博物館には、平野の映像資料館



平野町ぐるみ博物館ガイドマップ

や自転車屋さん、駄菓子屋さん、新聞屋さん、和菓子屋さん、幽霊、町家の博物館等々があり、今では13の博物館が毎月第4日曜日を中心に開館しています。また、平成11年7月には「きてみて100館」と題して、町じゅうの人に博物館の開館を募集し、3日間だけでしたが、100以上もの博物館が開館しました。これらの活動は、見るだけでなく、肌で感じてもらうことが特徴で、こういった活動を「感風」と呼び、活動をしていくうえでの大切な精神の一つとしています。

「平野郷HOPEゾーン協議会」の設立

平成11年には、地域内にある全てのものに価値があると考え、それら全てを修景保存・再生していこうと「平野郷HOPEゾーン協議会」、別名「平野和郷衆」が惣年寄、若年寄、勘定方、事務方、町守方、繁昌方、普請方の7人衆を役員として設立されました。この会では、平野の町並み再発見フォーラムや魅力探検とい



町並み模型をつくり、町家の連続性についての勉強会が行われた。

った町民参加のワークショップなどの活動を通じて郷土愛を再認識する活動と、伝統的な建物の改修や新築に際し、現在の町並みの雰囲気や継承するような平野らしい町並みづくりを支援する活動を行っており、平野の町ぐるみ博物館の活動と重なるものがあります。

伝統的建築物の改修のモデル事業として、約3ヶ月間実施してきた「亀乃饅頭」の改修工事も、3月に完成しました。この改修の設計案は、勉強会や研究会、家主さんとの話し合いを約半年続けた結果考え出されたもので、「おっちゃん、これ一個」と自転車にまたがったままでも買ってもらえるような開放的なつくりになるよう工夫されています。ここにも、遊び心で楽しみながら活動する平野の人々の心意気が伺えます。

今後も、遊び心で楽しみながらという心意気を持った活動を続けることで、平野の歴史のぬくもりを次の世代へと引き継いでいけることを期待されます。

京のまちの今昔物語

昭和20年代。東寺界限の露店市のにぎわい。まちの表情は変わりつつあるが、当時も今も、同じく人の営みが息づいている。



写真は上京区在住の方から頂きました。

「京のまちの今昔物語」では皆さんがお持ちの昔の写真を切り口にして、現在の京都の問題点を再確認できたらと思います。皆さんもお宅のアルバムの古い写真を探し出してぜひ投稿してください。

第1回 京都らしい景観・まちづくりに向けて 景観・まちづくりコンクール表彰式

これまで京都市が実施してきた「京都市都市景観賞」と「京都地域住宅＜HOPE＞コンクール」を引き継ぎ、当センターが実施する第1回景観・まちづくりコンクールは、平成11年末の作品募集、平成12年1月の作品展示会、2月～3月の審査委員会を経て、去る4月8日に多数の市民の方の参加を得て表彰式を開催しました。

本コンクールにご参加いただいた多くの関係者の皆様に改めて、お礼申し上げますと同時に、本コンクールを契機として、京都の景観・まちづくりに対する市民の関心と理解が深まり、取組が一層充実することを期待します。

京都景観・まちづくり賞

京都のもつ個性、独自性を創出し、優れた都市景観の維持及び向上に寄与していると認められる以下の4部門の建造物に贈られる賞。

ア. 建築物部門 イ. 緑地広場部門 ウ. 土木工作物部門 エ. 屋外広告物部門

応募64作品のうち、優秀賞に9作品が入賞しました。なお、今回、大賞の選考は見送られました。

作品名	建築主(敬称略)
株式会社ワコール本社ビル	株式会社ワコール 代表取締役 塚本能交
ラクト山科の施設建築物群(ラクトA-D) 山科駅前地区第一種市街地再開発事業	山科駅前地区第一種市街地再開発事業施行者 京都市 代表者 京都市長 樹本朝兼
山和小路団地	岩崎洋子
京都府立洛東高等学校	京都府教育委員会 教育長 武田盛治
川越邸	川越盛治
京都市久世ふれあいセンター・ 京都市久世特別養護老人ホーム	京都市長 樹本朝兼
四条烏丸FTスクエア	株式会社富士銀行 頭取 山本恵郎 東京建物株式会社 代表取締役社長 南敬介
株式会社竹下利本社社屋新築工事	株式会社竹下利 代表取締役会長 竹下和宏
道路景観整備 市道安井経7号線「ねねのみち」	京都市長 樹本朝兼

センターでは、入賞作品を詳しく紹介した「景観・まちづくりコンクール入賞作品集」を無料で配布しています。郵送ご希望の方は「景観・まちづくりコンクール作品集希望」と書いて、住所、氏名、電話番号をご記入の上、270円分の切手を添えて、センターまで、お送りください。

くらしの景観・まちづくり賞

身近な地域のもつ個性に配慮し、快適に暮らすための創意工夫が凝らされた建造物や、地域住民によるまちづくりの取組などの事例に贈られる賞。応募32作品のうち、大賞には2作品、優秀賞には14作品が入賞しました。

	作品名	建築主または取組の主体(敬称略)
大賞	西大路駅周辺のまちづくり	西大路駅周辺を美しくする会 会長 愛下正道 株式会社ワコール 代表取締役 塚本能交 財団法人 京都市駐車場公社 理事長 竹澤忠義
	K邸・京町家の手作りの再生による高齢者の 都心居住	北尾花子、北尾正博、北尾頼子
優秀賞	祇園町南側地区の町並み景観を守る取組	祇園町南側地区協議会 会長 杉浦貴久造
	自治・福祉・防災活動で創るケアドーム春日	春日住民福祉協議会 会長 高瀬博章
	丹波街道原宿の町並み景観を守る取組	櫻原町並み整備協議会 会長 豊田英嗣
	西陣・わっしょい	西陣・まちづくり委員会 会長 吉川哲雄
	安全なまちづくりに役立つ白い鳩保育園の 改築	社会福祉法人保健福祉の会 理事長 大野研而 白い鳩保育園 園長 小山逸子
	出町まちづくり会議の取組	出町まちづくり会議 代表 中井從道
	姉小路界隈を考える会の取組	姉小路界隈を考える会 会長 市古和弘
	四条大宮まちづくり協議会の取組	四条大宮まちづくり協議会 会長 加藤忠弘
	「借家生活」	駒井貞治の事務所 駒井貞治
	壬生の町家ギャラリー 幾一里	古民芸・古陶磁幾一里 荒井徹
フォレスト倶楽部	フォレスト倶楽部 皆野川ちか子	
京町家 保全・再生のさきがけ	磯野英生	
交差点になる家	林宏、林晃司	
天然素材で構成された健康な住空間	宗教法人正林寺 代表役員 吉澤秀則	



地域まちづくりセミナー

平成12年2月から3月にかけて、中京区、下京区の職住共存地区の地域住民の方を対象に開催してきた「地域まちづくりセミナー」は、3月29日の第5回の発表会を持って最終回を迎えることができました。この最終回は、京町家、マンション、袋路を題材に、誇りを持ち安心して生き生きと暮らすまちづくりに向けて、これまでグループごとに議論して



地域住民の方が発表する様子(第5回)

きた内容を発表し、他のグループの参加者と共有する場として開催しました。このセミナーを通じて、参加者による新しい交流や各地域でのまちづくりに向けての新しい動きが始まるようとしています。

主な発表内容

京町家グループ:「京町家の良さというのは、住んでこられた方が継承されてきた文化ではないでしょうか。そして、まちなかに住むということの魅力は、京町家のみならず、昔からのコミュニティが維持されていることにあるのではないのでしょうか。京町家を守るためには、このまちに住む人の精神を互いに高め合い、そして、地域で協力しながら解決策を検討する必要があると思います」

マンショングループ:「まちのことをよく知ること、まちを愛するという気持ちを持つことが大切。そして、まちのイメージをみんなで共有し、新しく入ってくる人、マンションを建てようとする人(業者)、行政等、外部の人にも伝えていくことが必要ではないでしょうか」

袋路グループ:「住み良い環境づくりとして、改築の問題等を解決する必要がありますが、コミュニケーションが取りやすく安心感があるなどという良さを生かし、新しい人を迎え入れることができるよう、ルールづくりや情報の収集、発信をする必要があるのではないのでしょうか」

『地域共生の土地利用検討会』 機能検討会始まる

中京区の旧京都ガス跡地(柳馬場姉小路下)を対象に、住民と企業が協働して進めてきた「地域共生の土地利用検討会」。平成11年末に土地利用基本構想をまとめ、都市居住機能、地域産業支援機能、地域文化発信機能、これらをつなげる交流機能を備えることが確認されたことを、前号でご紹介しました。

その後の検討会で、建物は「スケルトン建築」を導入することが確認されました。スケルトン建築とは、建物の柱や梁などの骨組み(スケルトン)を強固につくり、内装については可変性を持たせ、居住者やまちの変化を受け止めることができるものです。

先日開催した第10回検討会(4月26日)では、模型を用いてまち全体の構造について意見交換しました。検討会では建物の色調や材質、屋根の形等の意見交換に先駆けて、このまちの構造にふさわしい建物の形、これを踏まえたまちにふさわしい建物の構造・配置とは何か、という点から話を始めています。

また、施設に内包される4つの機能の具体的な姿については、地元が中心となる「機能検討会(地域共生の土地利用検討会の部会)」で、今後のまちづくりの展望とリンクさせながら検討を重ねていきます。

ここにどのような人が住み、どのような生活をしながらまちづくりと関わっていくのかということについては、地域共生の土地利用検討会において、ワークショップ等を通して広域的に需要を踏まえながら検討していきます。



第10回検討会の様子

景観・まちづくりシンポジウム 京都の景観まちづくりを考える

～第1回 景観・まちづくりコンクール入賞作品を通じて、活発な討論が展開～



コーディネーターの東樋口護氏(京都大学助教授)の進行により、同氏と共に本コンクールの審査委員をお願いした4名のパネラー、さらには本コンクール入賞者も加わって活発な討論が展開されました。

パネラーからは、「建物を敷地単位ではなく地域単位で検討する」ことの必要性や京都らしさには「形態としての質の高いデザインや周辺との調和だけでなく、地域の住民や働く人の暮らしや営みとの調和」が求められることが指摘されました。また、「自然への深い理解と配慮」と同時に、商いの活性化に向けた「個性と魅力あふれるまち

「京都の景観・まちづくりを考える」をテーマとしたシンポジウムを、4月8日に第1回景観・まちづくりコンクールの表彰式に引き続き開催しました。

づくり」の必要性、さらには、地域住民自ら「まちづくりの担い手として地域の将来像を共有し、ルールを定め、景観を向上していく」取組を進めていくことへの期待が寄せられました。

一方、入賞者からも、「企業としても地域に住み、地域に骨を埋める覚悟をもって今後も地域のまちづくりと関わっていく」ことへの決意表明が会場の共感を呼び、さらに、地域の防災性の向上とコミュニティ形成に向けた建替えに取り組んだ保育園からは「これまで地域からの支援に感謝すると共に、今後も共に歩んでいく」思いが語られました。また、地域のまちづくりに取り組んでこられた方々からは、住民の参加を進めていく上での考え方や心構え、あるいは行政に対する期待などが語られ、大いに盛り上がりました。

最後は、会場全体の大きな拍手で閉会し、住民、企業、行政のパートナーシップによる京都らしい景観・まちづくりの実現の可能性が実感されたシンポジウムとなりました。



入賞者からの発言

京町家の保全・再生事例

先人からのバトンを受け継ぐ

「小泉邸」(四条通西洞院東入北側郭巨山町)

商業ビルが立ち並び京都の繁華街。四条烏丸の交差点を西に向かう。車と人がせわしく行き交う四条通をしばらく歩くと、間口が広く中2階に虫籠窓のある京町家に出会う。明治43年に建てられ、90年間、この地の変化を見届けてきた。

鋼材問屋を営む先代当主が亡くなり、店を清算する中で、昨年、隠居所であったこの町家は売られることになる。家人は町家を壊さずに使ってほしいと願うが、出てきたのは潰してビルにという話ばかり。それを聞きつけ小泉



氏が引き継いだ。

「どうしても残してやりたいという気持ちが先に立った。表の喧噪を感じさせない穏やかな座敷の縁に腰掛け、静かに氏は話す。陽光浴びる新緑が眩しい。「こうやって、生活と季節を楽しむのが京町家の暮らし。楽しんでやらないと、家もかわいそうや。優しい目で庭を眺める。」



建物の東半分を占める倉庫は、格子の引き違い戸に表情を変えた。ビルの間で一層存在感を増している。表玄関の格子戸を開けると、奥まで長い通り庭が続く。店の間と奥を、内玄関にかかる暖簾がほどよく隔てる。台所にはおくどさんが残り、火袋の天窓から光が差し込む。奥の庭には蔵がどっしりと構えていた。

ほとんど原型をとどめている。傷んでいるところを直す、修繕を繰り返してきた。「使えるものは全部つかってやらないと、無駄なもの一つもないようだ。「壁や木や石、みんな息をしているんや。90年間

生きてきたんやから、傷むところも出てくる。それがまた、年輪を感じさせる。昔から『家は道楽息子や』と言うように、生き物として扱って、大事に直してやらないかん。いわば京町家の介護をしているようなもの。生き物同士の付き合い、これが基本や思います。町家と向き合う氏の姿がある。

「建てた人の気持ち、大工さんの気持ち、住んであった人の気持ち。それらがいっぱい詰まっている。私は先代からのそうして建ててつくって住んであった人のバトンを受け取っただけです。そのバトンが大切で。次に誰かにバトンを受け取ってもらうまではと思って、責任をもって走るつもりです。」

「京町家に住むことが京都の文化であると思う」と言う氏。この4月から毎月1回、氏の所属する「京都こだわりの会」は、京町家に関する職人さんや住む人のおもいを語り合う「町家で町家をトーク」をはじめた。ここで京町家を体感してもらえたら。そう願ってやまない。

バトンを受け取る人は多いほど良い。そうやって、京町家は引き継がれてきたのだと改めて感じた。

12年度予算・11年度決算の概要

センターの平成12年度事業計画及び収支予算並びに平成11年度決算の概要を報告します。

平成12年度事業計画 (は自主事業、は受託事業)		平成12年度収支予算 (12年4月～13年3月 単位:千円)		平成11年度決算 (11年4月～12年3月 単位:千円)	
地域まちづくり	地域まちづくりセミナー まちづくり活動支援 (まちづくり専門家派遣、まちづくり活動助成) 地域まちづくり推進ネットワーク 住民参加型まちづくりデータベースモデル構築 京都市職員受託研修	(収入の部)	基本財産運用収入 240 会費収入 2,400 補助金等収入 102,200 雑収入 4 基本財産収入 10,000 前期繰越収支差額 3,700 合計 118,544	(収入の部)	基本財産運用収入 363 会費収入 3,700 (個人 110口、団体63口) 補助金等収入 149,543 雑収入 80 前期繰越収支差額 2,726 合計 156,412
地域と共生する 土地利用の促進	京町家ネットワーク(一部受託) 地域共生の土地利用ネットワーク	(支出の部)	事業費(自主事業費) 68,326 " (受託事業費) 7,500 管理費 32,518 固定資産取得支出 10,000 予備費 200 合計 118,544	(支出の部)	事業費(自主事業費) 54,519 " (受託事業費) 66,336 管理費 31,926 予備費 0 合計 152,781 次期繰越収支差額 3,631
情報発信 ・相談等	景観・まちづくりシンポジウム ニュースレター「京まち工房」 ホームページ まちづくり相談				会費収入の充当先は自主事業費です。

『まちづくり交流』

『アートテックまちなみ協議会』

地域の景観や環境問題への関心が高まる中、様々な主体によりこれらの課題について取組が進められています。今回のまちづくり交流では、平成12年2月にNPO法人(特定非営利活動法人)に認証された、技術とデザインの両面からまちなみ整備を提案する「アートテックまちなみ協議会」について報告します。

アートテックまちなみ協議会の前身である「ART-TECまちなみ協議会」(ニュースレター第6号に掲載)は、技術とまちなみづくりの融合を目指し、平成9年9月に結成されました。その後ベンチャーの斬新な技術とデザイン・企画力でまちなみ整備に関する様々な活動を展開してきました。そして今後の活動の展開を踏まえ、NPO法人となることを選択しました。現在会員は24名、京都市ベンチャー目利き委員会 Aランク企業の代表やランドスケープ・アーキテクト、デザイナー、ファイナンシャルプランナー、建設業等、まちづくりを取り巻く様々な課題に対応するために各分野の専門家及び学識経験者で構成されています。

毎月開催される定例会では、まちづくり及び景観に資する新技術についての意見交換が行われ、その内容は様々な場所で市民や学識経験者に紹介されてきました。

地域まちづくりとの関わりも深く「堀川と堀川通りを美しくする会(ニュースレター6



理事長の隠塚 功さん

号参照)や「祇園町南側地区協議会(同9号)への支援活動を展開しています。

「これまでのまちづくり活動への参加・支援はメンバー相互の交流などちょっとしたご縁からです」とアートテックまちなみ協議会理事長の隠塚功さん。

祇園町南側地区では、今年5月10日から1週間、地域にふさわしい道路舗装を検討するため、様々な舗装パターンを展示し、実際に目で見て考える機会を提供しました。

「私たちはNPO法人として、京都のベンチャー企業の持つ技術と地域まちづくりの橋渡し役となることを目指しています。そのためには京都に生まれる様々な業種のベンチャー企業とおつきあいを展開すると共に、京都のまちづくりの状況や地域の望んでいる内容を冷静に判断しなければなりません。しかし我々の協議会はまだまだ皆さんに認知されていませんから、まずは京都のベンチャー企業同士のネットワークを広げ、そしてその技術を広くまちづくり活動を展開されている方に発信する必要があると思っています」。

アートテックまちなみ協議会も当センターも、まちづくりの橋渡しを目指すという役割は同じです。そしてアートテックまちなみ協議会は、企業の中でもベンチャー企業が直接まちづくりに対して技術的な支援を行うパートナーシップを構築することを目指しています。

センターは、これら草の根的に広がるネットワークの中核として機能し、それぞれのネットワークがより広域に、有機的に結びつく結節点となることが求められています。



地区内のガレージで数パターンの舗装材が展示されました。

お問い合わせ

アートテックまちなみ協議会 事務局
京都市左京区松ヶ崎雲路町17番地1号
AIM北山B2
TEL : 075-706-2750
FAX : 075-706-2960
URL : <http://www.arttec.org>

京都市ベンチャー目利き委員会

次の時代の京都経済をリードするベンチャー企業を発掘、育成するため、起業を考えている事業プランの事業性、技術、アイデアなどを評価するために設立された委員会。Aランクとは事業成立可能性が大きいと評価され「ベンチャー企業育成支援融資」が利用できる。

まちづくり提案

古材バンクの会

大量生産、大量消費及び大量廃棄を基調とする社会経済活動の進展に伴い、身近にはごみの増大や、地球温暖化、オゾン層破壊等の地球規模の環境問題が発生する中、環境との共生に向けた様々な取組が行われています。

今回は、木造建築材料のリサイクルという視点から、資源を大切に社会を目指す活動に取り組んでいる「古材バンクの会」を紹介します。

恵まれた森林資源を活かし、自然と共生しながら長い年月の中で育まれてきた日本の木造建築文化。先人達の様々な知恵と優れた技術で建てられた木造建築は、適切な管理のもとでは、百年、二百年の寿命を保つ耐久建築でもありとも言われています。しかし、現在では、社会経済構造の変化、建築家や居住者の意識や生活様式の変化、相続問題などにより、まだまだ使用可能な木造建築が、いとも簡単に取り壊

され、大量に廃棄されています。

こうした状況の中、「古材バンク構想」の実現に向けた準備検討を行うための任意組織として、平成6年9月、伝統的木造建築物が数多く存在するここ京都の地で、「古材バンクの会」は設立されました。

古材バンクの会では、やむなく取り壊される古い木造建築を資源として再活用するため、古材の提供者と利用者のネットワークを作り、提供希望のあった木造家屋情報を利用希望者へ発信する古材情報ネットワーク活動の他、民家再生についての相談や木造建築の見学会やセミナー、民家再生や古材の再利用に関する調査研究・助言を行っています。

また、昨年、市民や建築家を対象に伝統的木造建築に関する技能を、実体験を通して学ぶ「甲乙塾」を開講されています。この塾は、接する機会の少ない職人技能に直接触れることにより、伝統木造建築技術への理解を深めてもらおうと企画運営されているものです。昨年は



見学会の様子(左京区吉田山「茂庵」)

「土壁」をテーマに、左官職人を講師に招き、実際の建物を使って、土壁を剥がすところから、土をこね、壁を塗



荒壁を塗る甲乙塾参加者

るという一連の工程を実際に体験しました。また、今年度は「茅葺き農家の解体」をテーマにした塾を開講しています。

環境への負荷の少ない循環型社会と、自然とふれあい、安心・安全で快適な暮らしを営むことができる社会環境の実現に向け、古材バンクの会の役割が期待されます。

古材バンク構想

京都府林務課が行った「木質廃棄物資源利用促進体制整備事業」の「古材リサイクルシステム検討部会」において、平成4年度から2カ年にわたり検討されてきた、古材資源の有効活用に関する提言

お問い合わせ

古材バンクの会
京都市東山区本町17丁目354番地
TEL : 075-532-2103
FAX : 075-551-9811

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

ドラゴンフィールド株式会社

代表取締役 甲斐 真樹氏

- 事業内容を教えてください。

今では個人の生活にも気付かないうちにインターネットが浸透してきていますが、起業した5年前は対抗する会社は日本になく、これからどんどん伸びる産業だと着目して、アメリカのYAHOO!のように、インターネット上に点在するホームページの中から目的の情報を検索する機能を持つ、サーチエンジンを始めました。メールマガジン(メールで配信される情報)の発行やオンライン広告(ホームページ上に設置される広告)の設置と、いろいろ手掛けています。



業界的にはニーズが高まっているので、4、5千万円の売上にはすぐ達しますが、学生ベンチャーは成長企業にはなりにくい。一定の水準を越えるには、誰にもできないことをする必要がある。始めて2年ぐらい経ってから、得意分野をつくって専念していこうと、メールを配信する技術を開発しました。それまでメールマガジンの発行などに力を入れる会社は多かったのですが、配信する技術は重要視

されていませんでした。そこに目を付け、他と違うことをやろう、と思いついたのです。

現在では、顧客管理のデータベースと連携させたメール配信を得意としています。いくら通信機能が発達しても、国によって生活習慣が違います。また、個人によってもその嗜好は違います。そういった様々な情報をコンピュータ上で整理するデータベースづくりを行い、それに合わせてメールを配信できるといった特色を出しています。

- 世界的なマーケットですが、なぜ京都から発信を?

販売では東京の方が断然有利です。そのため、東京の会社と資本提携や販売提携を行っています。ただ、製造を考えると、従業員が良好な環境、安心して仕事ができる環境として、職・住・遊の揃った京都にこだわりはあります。

この分野では、技術を伸ばすより、いかに安定して供給できるか、コストをどれぐらいに抑えられるか、いかに信用できるかが重要視されます。そういった意味でマネジメント次第といえます。技術ではなく、重要なのは人なのです。

私は大学卒業後、住んでいた大学近くのワンルームマンションを事務所にして、創業しました。そのことによって、大学という人材の宝庫を得ました。それから従業員数も増えましたが、今でもスタンスは変わりません。従業員一人一人が満足して働けているか、経営者として常に気配りしています。そこからビジネスが生み出されていると考えるからです。

また、京都では東京と比べてハードルが高



い分、良質のものをつくらないといけない。そういったエネルギーを掻き立てる地です。京都には任天堂や京セラを生み出した土壌があります。

- 今後の事業展開をお聞かせください。

これからますます、産業界全体でインターネットに対応できるよう基盤整備が進むでしょう。また、メールに関しては、携帯電話での受信が可能になり、その普及とも相まって、ますますマーケットが拡大していきます。成長過程なので、今は何をやっても成功しますが、いずれは成熟期を迎えます。そのときに、いかに伸びるかが課題ですね。常にマーケットの動向を見ながら、得意分野とのマッチングによって事業内容を検討していく必要があります。

事業チャンスを見つけて人材を育てながら、京都が持っている文化や、職・住・遊の揃った環境、京都の良さを活かしながら、武器にして伸ばしていきたいと思っています。

ホームページアドレス

「ドラゴンフィールド株式会社」

<http://www.dragonfield.com>

関連会社「e 365株式会社」

<http://www.e365.com>

《センター解説アワー》

『コミュニティガーデン』

コミュニティガーデンとは?

コミュニティガーデンとは、名前の通り「地域(コミュニティ)」で維持管理を行う「庭(ガーデン)」で、アメリカやイギリスで始まった活動です。

コミュニティガーデンは、参加型の「緑のまちづくり」としてだけではなく、人と人、人と自然、人と社会のコミュニケーションを育む場所にもなるとして注目されています。

様々な取組と効果

アメリカのコミュニティガーデンは1970年代に始まり、80年代以降、全米規模で盛んになりました。例えばニューヨーク市では、1万件以上ある荒地のうち、1,000カ所近くがコミュニティガーデンとして活用され、様々な効果が見いだされているそうです。緑を育成することによる癒し、近隣の美化、自給自足の促進、地域資源の保護、レクリエーションや教育の効果などです。また非行少年の更正施設として活用されているものもあるようです。

日本でもコミュニティガーデンは、大小さまざまな規模で展開されてきています。東京都世

田谷では、住民と区が協力して『ねこじゃらし公園』を作りました(ニュースレター1号参照)。公園の計画づくりから住民が参加し、雑草がはえる『はらっぱ』として公園はデザインされました。住民が管理することで、自然と触れ合いながら都市環境や広く地球環境について学ぶ場となっています。

京都における可能性

コミュニティガーデンの注目すべき点は、これら緑の維持管理活動による精神衛生的な効果だけではなく、いわば不動産を共同管理し、自分たちで責任を持って運営している点です。

京都では古くから町単位の自治が確立し、町の自衛のために木戸門を設置したり、町家(ちょういえ)を共同で維持管理していました。明治初期に建設された番組小学校は町衆自身で建設され、コミュニティセンターのような役割も担っていました。これらハードのマネジメントは、町式目等まちの資質を反映したまちに住むルールが明確に定められ、共有されていたことに依拠していました。

ところが時代が下がるにつれ、これまで学区

の自治で行われていた公共の仕事を行政が担うようになり、まちで受け継がれてきたこれらのシステムは徐々に無くなってきました。

しかし祇園祭の多くの鉾町では、その必要性から、会所が地域で維持管理されていますし、また生活スタイルの中にはまちなかで暮らす上での多くのルールやマナーが継承されています。もちろん社会経済的背景を踏まえると「当時のルールを現代にも」というのは現実的ではありません。ただ鉾町における会所のように、まちの合意形成システムの確立により、必要性に応じて現代でも地域で不動産を共有の財産としてマネジメントすることが可能だと実証されています。

ニューヨークでは、その社会的必要性から「ガーデン」つまり緑をコミュニティで維持管理しています。今後、京都では様々な地域で、地域の個性を反映したまちづくりがますます展開されていくことと思われますが、その必要性に応じて、コミュニティガーデンの京都版、例えば空家を地域で維持管理し、まちづくりの拠点として活用するコミュニティ「町家」なるものも登場することが期待できるのではないのでしょうか。

私と京都



博多から京都まで

産地は九州の博多。天神へ徒歩15分、中学の校区内に中州があるという恵まれた環境に育ち、祇園山笠の季節が来る度に胸を躍らせた。都心部の歴史ある小学校に通い、親の代から同じ学校という友達も多い。

二十有余年前、まだガキだった僕は、なんとはなしに京都学派にあこがれて(実は一人暮らしにあこがれて)博多をはなれ京都の地にやってきた。大学時代は物見遊山にあけくれ、おかげで京都の観光地には結構詳しくなった(何回、友人のデートコースの相談にのっただろう)。でもその頃、僕の根っこは博多にあって、ゆったりと時間が流れ学生にやさしい京都は、ただ遊学の地として心地よかった。

「まちづくり」に出会い、こんな仕事をしたいと思いはじめた大学院時代、やっぱりまだガキだった僕は、活気に乏しい京都がうっとうしくて、庶民的で元気な大阪で働こうと密かに心に決めていた。しかし、まずは設計の修行をしようと思い定めはしたものの、大学院で調査ばかりしていた僕を受け入れてくれる奇特な事務所は少なく、結局、京都の事務所で働くことになる。その頃も、僕の根っこは博多にあった。

ズルズルと京都に居続け、結婚することになったとき突然、自分がとうとう博多の根っこを

(財)京都市景観・まちづくりセンター評議員

乾 亨

立命館大学産業社会学部教授

切りこの地に根をおろすのだと、理屈抜きで理解した。祖父母・父母・兄弟達の持つ人間関係と絡み合いつつ、自分と近所、自分と友達とのつながりが醸し出されている、あのぬるま湯みみたいな暖かさ(煩わしさ?)と縁が切れ、移民一世として京都に住むのだと覚悟した。

少しはガキでなくなったいま、京都が(街の形も、住民の気質も違うのに)自分の知る博多によく似ていることがわかる。このまちのあちこちに、自分が切り捨てた暖かな関係が確実に存在していることを日々感じている。それと同時に、移民一世の気楽さと寂しさもよくわかる。煩わしいもイヤだけど、誰だってやっぱり根っこは欲しい。自分を認めてくれる知り合いも欲しいし、住んでいる場所には愛着を持たた方がいい。結局「まちづくり」とはそれらを恢復するところみなのだと思う。だから僕は、せっせとまちづくりの手伝いをする。決して「京都」が特別だからではなく、京都にも(他のまちと同様に)人がいて暮らしがあるからなのだけれど、実は最近、こんな面白いまちに住むことになってよかったと、つくづく思っている。「ホンマに「縁は異なるもの味なもの」とは、よう言うたもんや.....

センター語録

今年3月18日から、淡路島にて花博「ジャパンフローラ2000」が開催されています。テーマは「人と自然のコミュニケーション」。緑と私たちの生活の関わりは随分と多岐に渡ります。春になると、私もついガーデニングもどきの行為をしておりますが、このように生活に潤いを求めて(!?)広くは環境を改善するため、そして花博では震災からの復興の「象徴」として、緑は様々な顔を持っています。

まちづくりにおける緑の役割も、パブリックゾーンとしての緑から、花・緑・水を基調にした安全で快適な美しいまちづくり、多様化した私たちのライフスタイルにこたえるものが要求されるようになってきています。今回のセンター解説アワーでもコミュニティガーデンを取り上げましたが、今後はまちづくりの主体性を具現する象徴としての、緑の役割も期待できそうです。

生活に密着し、幅広く展開している緑のまちづくり。一方京都は文化やなりわい、独自の風習が生活に密着しています。そういう意味でも生活に密着した、独自の風習などに基づき進める「京風」のまちづくりがあってもいいのではないのでしょうか。

(景観・まちづくりセンター事務局 O.S)



センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成12年度分)

京都のまちづくりに貢献したい!センターの活動を応援したい!そんなあなたの熱意をお待ちしています。

- [特典] ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会費]

個人1口:5千円 団体1口:5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

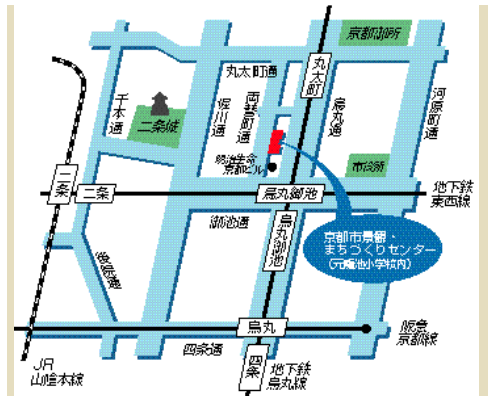
京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>



センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

(財)京都市景観・まちづくりセンター「京まち工房」案内



〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452 (元龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031
(支援・参加・人づくり)

FAX 075-212-4047

e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月~金(祝日を除く)9:00~17:00

来所される場合はなるべく事前にお電話ください。

なお、駐車場はありませんので地下鉄等をご利用ください。